

言語名称「朝鮮語」および「韓国語」の言語学的考察

内山政春

1. はじめに

2002年12月7日、駐日韓国大使館韓国文化院と財団法人国際文化フォーラムの共催により『フォーラム2002：日本における韓国語教育の現在』が開かれた。その中の第1セッション「学校における韓国語教育の現状をさぐる」では「言語呼称の問題を考える」がテーマのひとつとしてとりあげられ、植田晃次氏（大阪大学言語文化部）、金鍾浩氏（駐日韓国文化院）とともに、筆者もオブザーバーとして発表する機会をあたえられた。

おもに朝鮮半島において使用される言語に対する現代日本語の名称には「朝鮮語」や「韓国語」のほか、「韓国・朝鮮語」や「コリア語」などがある。近年では、もともと文字の名称として用いられていた「ハングル」も言語名称として一般化しつつある。当日の発表では、植田氏が自身の論考、すなわち植田晃次（2002）にもとづき、「朝鮮語」と呼ぶべきであると述べ、金氏は「韓国語」の正当性を主張した。筆者は「朝鮮語」も「韓国語」も正しい呼び名であるから選択は当事者にまかせるべきであり、ただしいくつかの理由から筆者は「朝鮮語」を用いると発言した。小栗章（2003：44-45）は金氏と筆者の発言要旨に修正をくわえたものである。

植田晃次（2002）は、総論としては賛成できる部分が少なくないが、論理の展開にやや強引な部分がみられる。金氏の発表要旨は、本国の韓国人による「朝鮮語」反対論によくみられるものである。なお当日の発表は時間的制約もあり「現状を確認する」レベルにとどまった。

本稿は、当日の発表要旨を骨子としつつ、植田晃次（2002）の論点も考察の対象としながら、大幅な加筆をおこなったものである。先行研究については植田晃次（2002）にくわしいので、重複を避け、特に必要な場

合以外は言及しない。本稿では総称に「朝鮮」を、言語名に「朝鮮語」を用いることを原則とするが、議論の混乱を避けるため、総称として Korea を必要に応じて用いることもある。なお大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国の略称を本稿では「韓国」、「北朝鮮」と表記することにする。

2. 「朝鮮」と「韓国」の現代日本語の意味

2.1. 本稿の視点と方法論

植田晃次(2002)は「これまで朝鮮語の呼称に関する議論も行なわれてきたはした」が「社会言語学的観点の抜け落ちたり不十分であったりすること」や「次元の異なる問題が同一次元で論じられていることなどにより、ややもすれば感情論に流れたり、論点が錯綜するということが見られた」と述べている(：1)。その前提から「言語名と国家名は相容れないものであり、韓国語のように国家を単位として言語の呼称を設けることは矛盾を持つ表現である」として、「言語・民族・国家の関係といった社会言語学的な視点から、朝鮮に関して、総称・正式国名の略称・地域名について再考する」と述べている(：6)。そして総称は「朝鮮」あるいは「韓」(韓国ではない)であり、正式国名の略称は大韓民国が「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国が「共和国」であり、地域名は朝鮮半島北部が「北朝鮮」あるいは「北韓」、朝鮮半島南部が「南朝鮮」あるいは「南韓」であるとして⁽¹⁾、これが日本語による名称であることを強調するためであろう、ひらがなによる表記(「ちょうせん」や「かん」など)をあわせて表記している(：7)。

植田晃次(2002)の「本稿では「日本人による日本語での呼称」という視点を採ることを大前提とする」という主張(：6)には筆者も大賛成である。しかしこれらの名称の中で「韓」そして「北韓」や「南韓」は「日本人による日本語での呼称」として適当であろうか。現に「ただし、現代日本語では韓半島・韓語・韓人・韓料理のように、「韓」を総称として用いることはあまりない」と述べているのである(：7)。

植田晃次(2002)はまた、おそらくそのおおくは「用例」をみいだせないであろう「理論的に考える呼称」を列挙したり(：5)、「朝鮮という呼称にまつわりつくものからの解放のためには、固有名詞である朝鮮や

韓を漢字音の読み替えをせずに、チョソンやハンを導入し、正式国名とその略称として、チョソン民主主義人民共和国と大ハン民国（あるいはテハン民国）、チョソンやハン国などを導入することの可能性についても考慮する余地がある」としているが（：15）、本稿の視点は、現実に使われていないこのような名称を論じるところにはない。本稿では「朝鮮語」と「韓国語」が現代日本語において隣国の言語名称として実際に用いられているという事実から出発する⁽²⁾。それこそが「言語学的な視点」であると筆者は信ずるからである。本稿ではまず、「朝鮮語」と「韓国語」を構成する要素である「朝鮮」と「韓国」が現代日本語でどのように用いられているかを、朝鮮関係の書籍から用例を収集し、観察することにしたい。

2.2. 「朝鮮」の意味

植田晃次（2002：10）は「朝鮮半島・南北朝鮮などの用法に見られるように、日本語の〔ちょうせん〕は国名の略称ではなく、地域・民族・言語の名称などを包括した、時空を超えた総称である。すなわち、朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国＝北朝鮮ということではない」と述べている。この主張は妥当であろうか。「時空」つまり時間的、空間的にどの範囲を指しているのかに注目しながら、用例⁽³⁾を検討することにしよう。

- 1) 高麗の美術ではまず青磁をあげるべきである。／…………／朝鮮の美術では絵画が重要である。 [張籟根（1997：243-244）]
- 2) 反対に日本では、朱子学を朝鮮より九十年早い一二〇〇年に受容したが、徳川時代に朱子学が…。 [古田博司（2002：216）]
- 3) とくに第二次世界大戦のための挙国一致体制が“内鮮一体”の標語の下に朝鮮にも徹底され…。 [伊藤亜人（1997：26）]

時間的には1)が李朝、2)が高麗、3)が植民地期である。空間的にはいずれも朝鮮半島全域（厳密に言えば高麗の領域は朝鮮半島全体よりはせまいが）を指しているといえる。1)は高麗と対比させ、特定の時期を指す王朝名として「朝鮮」が用いられている。2)はしかし十二世紀であるから「朝鮮」は王朝名ではない。この場合は包括的な名称、つまり総称と

して「朝鮮」を用いたのである。3) は、植民地期の朝鮮半島の正式名称が「朝鮮」であった⁽⁴⁾ ことをかんがえると、特定の時期を示す名称ともとれるし、あるいは総称と解釈することも可能であろう。

4) 開城は朝鮮を南北に分断する三八線上の板門店のすぐ北。かつての高麗王朝の都である。 [萩原遼 (1989 : 136)]

5) 南北対話を通じて、二つの朝鮮は南北対立の新しい形態を模索したのである。 [小此木政夫 (1997 : 107)]

6) 今日中国の周辺に朝鮮、ベトナム、日本という「民族国家」があることとそれぞれの漢字音の成立は決して無縁ではなからう。

[伊藤英人 (1997 : 77)]

4) ~6) は空間的には朝鮮半島全域を指している。5) は韓国と北朝鮮というふたつの国家をそれぞれ「朝鮮」と呼び、6) はそれらふたつの国家を包括して「朝鮮」と呼んでいる。5) と6) は国家を指しているが、4) はそうとはいえない。時期的にはいずれも現代とすることができようが、現代において「朝鮮」は国名としては朝鮮半島全域におよんでいないので、4) ~6) は総称と判断することができる。

7) その人は一九六六年三月、ベトナム支援の国際統一戦線形成の問題でベトナム、中国、朝鮮の三か国を訪問した日本共産党代表団(団長宮本顕治書記長)の一員であった。 [萩原遼 (1989 : 156)]

7) の「朝鮮」は朝鮮民主主義人民共和国を指している。つまりこの意味では、総称の「朝鮮」とは時間的にも空間的にもことなる。

以上のことから、本稿では「朝鮮」に次のよっつの意味を設定したい。

①総称

②過去における王朝の名称⁽⁶⁾

③韓国併合から大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国成立までの名称

④朝鮮民主主義人民共和国の略称

空間的には①、②、③が朝鮮半島全域、④は朝鮮半島北部のみを指しており、時間的には①は時間とは無関係であり、②、③、④が特定の時期を指しているといえる。

2.3. 「韓国」の意味

「韓国」が大韓民国の略称である、というのは植田晃次（2002）の指摘をまたずとも自明のようにおもわれるが、念のため用例をみてみよう。

- 8) もう一つは、韓国の国防政策において、北朝鮮への対処だけでなく、周辺大国とのバランスが…。 [室岡鉄夫（2002：71）]
 9) なお、日露戦争が終わると、除隊した日本兵の中には、韓国に留まるものが少なくなかった。 [高崎宗司（2002：99）]

8) はたしかに大韓民国という「国家」を指している。ただし9) のように「韓国」が「大韓帝国」でもある事実¹⁰⁾に留意する必要がある。

- 10) 伝統料理通として自他ともに認める友人によれば、韓国の料理は、材料を掛け合わせて新しい総合的な味を創造するものであるという。 [伊藤亜人（1997：67）]
 11) 韓国の伝統的な食生活というと日本ではキムチと焼き肉を思い浮かべるものが多い。 [伊藤亜人（1997：53）]
 12) なぜなら『三国史記』や『三国遺事』といった韓国の古文獻を読めば、古代の日本と韓国はおおらかな古代空間のなかで共生していたことが実感されるからである。 [田中明（2001：19）]

10) は言語外現実としては現在の大韓民国を指しているといえるが、ここでの「韓国」が「国家」であるかはうたがわしい。むしろ「地域」としてとらえるべきものとかんがえる（「韓国」が地域名でもありうるということについては後述する）。さらに11) の「韓国」が大韓民国成立以降に限定されているとはかんがえにくい。12) は、筆者にとっては抵抗を感じる表現であるが、この場合の「韓国」は総称とみなさざるをえない。

植田晃次（2002：7）は、日本語の表現としての「韓国語」や「韓国料理」などが大韓民国成立以前をふくむとはかんがえにくいと述べているが、実際にはこのような用例が存在するのである。

以上のことから、本稿では「韓国」に次のみつつの意味を設定したい。

- ①大韓民国の略称
- ②大韓帝国の略称
- ③総称

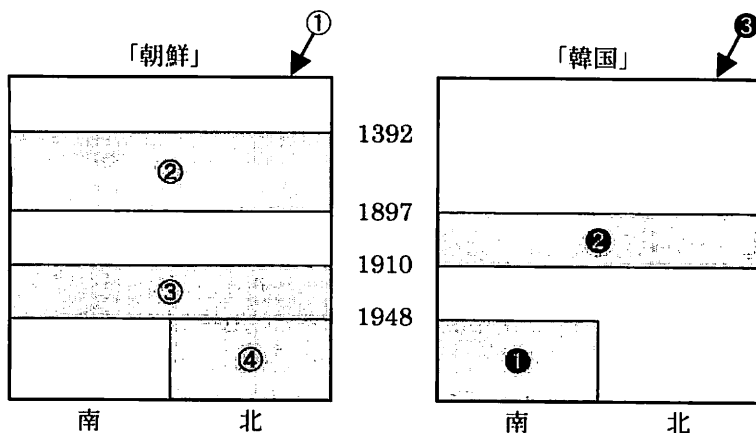
空間的には①は朝鮮半島南部のみ、②、③が朝鮮半島全域を指す。時間的には①、②が特定の時期を指し、③は時間とは無関係であるといえる。

3. 多義語をめぐる問題

3.1. 「朝鮮」と「韓国」の時間的、空間的範囲

以上の考察で判明したように、「朝鮮」と「韓国」は多義語である。それでは多義語である「朝鮮」および「韓国」が含む時間的、空間的範囲を、意味ごとに整理してみることにしよう。以下の〔図1〕に示す。

〔図1〕「朝鮮」および「韓国」にふくまれる時間的、空間的範囲



縦軸が時間、横軸が空間、太枠の範囲全体が総称である。「朝鮮」については、①は総称であるから、当然②、③、④をふくむことになる。しかし②、③、④は重なりあわない。「韓国」の場合もおなじく、①と②は重なりあわないが、③は総称であるから①と②をふくむ。しかも総称である①と③を除くと、②、③、④、①、②は、いずれも重なりあわない。つまり相補分布の関係にあるのである。よって「朝鮮」と呼ぶか「韓国」と呼ぶかが問題になるのは、総称として用いられる場合、ということになる。

「朝鮮」と「韓国」が多義語である以上、文脈によってはどの「朝鮮」なのか、「韓国」なのかがあいまいになることもあろうし、どの意味で用いているのかを明確にしたくなる場合もあるであろう。その場合、言いかえがおこなわれる。

3.2. 「朝鮮」に対する言いかえ

朝鮮半島を指す総称としては、従来「朝鮮」が一般的に用いられてきたといえる（「朝鮮半島」という呼び名自体がそうである）。しかし他の意味とのちがいを明確にするため、次のような表現も用いられる。

- 13) ここで「東アジア」とよぶ地域は、中国地域と朝鮮半島、および日本の三つの地域からなっている。 [佐々木高明 (1986 : 134)]
- 14) しかしすでに朝鮮語を学ばれ、半島の文化や歴史に詳しく、日本と半島諸国の相互理解、親善交流を身をもって実行しておられる方々が、もしこの本を読まれるようなことがあれば…。 [鈴木孝夫 (1981 : 18)]
- 15) 1 / 4 コリアの血が流れ、93年には韓国に留学した。そんな作家の鷺沢萌氏はこう話す。 [福光恵 (2002 : 47)]
- 16) さらに KOREA の文学・歴史・生活・民俗・書籍・現状を紹介するページも用意し、KOREA それ自体の理解の手助けとしました。 [菅野裕臣 (1985 : 5)]
- 17) 良いことをすれば日本名で讃えられ、悪いことをすれば韓国・朝鮮の民族名で後ろ指をさされる。 [野村進 (1996 : 62)]

13) は「日本」と対比させるのであるから、単に「朝鮮」でもいいのであるが、総称であることを明確にするために「朝鮮半島」を用いている。そして14)のように誤解の余地がない場合、「半島」のみで Korea をあらわすことができる。15)のように英語に由来する外来語を用いる方法もあり（最近広まっている「在日コリアン」という呼び名は、「在日韓国・朝鮮人」という名称の定着にともなって「在日朝鮮人」が総称として機能しにくくなっていることから生じたものであろう）、ローマ字で表記された16)のような例もある。17)のようにいわば「両論併記」によって総称であることをあらわす例は非常におおく、これには「韓国朝鮮」などのバリエーションがある。

次に王朝名をあらわす②の意味での言いかえをみとみることにする。

- 18) 14世紀後半、朝鮮半島沿岸に出没する和寇を撃破して名声を高めた李成桂は、1392年に高麗を倒して李氏朝鮮をたて、漢陽（現在のソウル）に都を定めた。 [江上波夫ほか（2002：87）]
- 19) 高麗に代わる李王朝は、開国の当初からこの女真の鎮撫と討伐に力を注ぎ、十五世紀後半には…。 [伊藤亜人（1997：14）]
- 20) 安東権氏の中でも在京両班化しなかった家系は、ひき続き安東の吏族としてとどまっていたが、これらの家系から在地両班層が形成されてくるのは李朝に入ってからである。 [宮嶋博史（1995：34）]
- 21) 儒学の中でも朱子学は朝鮮王朝に国学として採用されて以来、支配層である官僚の間における政治理念としてばかりでなく、これを根本的な社会倫理とした人民の教化が進められた。 [伊藤亜人（1997：84）]
- 22) これは朝鮮朝における士大夫たちの言挙げと振舞いとを継承したものである。 [小倉紀蔵（2001：123）]
- 23) ただ朝鮮時代からの儒教の教化によって、儒教的な価値は程度の差はあれ受容されており…。 [秀村研二（1997：174）]
- 24) 朝鮮の儒教社会は、李朝時代に中国の儒教が体制教学として採用され、儒者官僚による苛酷なイデオロギー強制が、上は王から下は奴婢まで適用された結果…。 [古田博司（2002：216）]
- 25) 朝鮮王朝時代において、儒教規範によって父系血縁の家族・親族が門中という形で組織化されていくのは…。 [秀村研二（1997：169）]

26) いわゆる伝統社会といわれるときに念頭におかれるのは、日本が植民地支配をおこなう以前の李氏朝鮮王朝時代である。

[秀村研二 (1997: 169)]

王朝名をさす「正式名称」として、日本語では18)の「李氏朝鮮」が用いられてきた(これは高校の世界史教科書の例文である)。韓国での正式名称である「チョソン〔朝鮮〕」をそのまま用いずに「李氏」を冠する理由は、いうまでもなく②の王朝名の意味を①の総称の意味から区別するためである。朝鮮は朝鮮でも「李氏」の朝鮮だというわけである。19)のように李王朝とも呼ばれ、より一般的には20)のように李朝という名称が用いられている。

以前、韓国政府が日本の歴史教科書に対する記述是正を要求したことがあったが、その中に「李氏朝鮮」という名称は不当であるから「朝鮮」にただせという項目があった。「李朝」も植民地時代に用いられた不適切な用語と認識されている(この問題に関しては後述する)。韓国では正式名称の「チョソン〔朝鮮〕」に、「ワンジョ〔王朝〕」をつけて「チョソナンジョ〔朝鮮王朝〕」、あるいは「チョソンジョ〔朝鮮朝〕」といわれることもあり、より一般的には「チョソンシデ〔朝鮮時代〕」と呼ばれる。21)はともかく、22)と23)は、筆者の語感では韓国における朝鮮語の直訳であるとの観をまぬがれない。24)は日本語の「江戸時代」などと並行的な表現であるともとれるが、「朝鮮時代」と「李朝」の折衷とも解釈できる。25)と26)も、「李氏朝鮮」は使えないが「朝鮮」と呼ぶには日本語の語感として抵抗がある、とかんがえた「苦心の作」であろう。

韓国併合から南北朝鮮建国までの時期を指す③の意味については、たとえば「日本統治下の朝鮮」などといえようが、これは総称ともとれる。独立国家ではなく「地域」であった時期であるために、総称との区別が必要とされないのではないとかんがえられる。

④の意味、つまり朝鮮民主主義人民共和国の略称としての「朝鮮」は、当事者の主張にもかかわらず⁽⁶⁾さほど用いられないようである(前述のように用例はある)。現在もっとも一般的に用いられるのは「北朝鮮」であろう。文脈上あきらかな場合には「北」とも呼ばれる。植田晃次(2002: 7)は「朝鮮民主主義人民共和国は通常「北朝鮮」と略されるこ

とが多いのだが、正式国名のどこにも「北」ということばはなく、これは正式国名の略称とはなりえない」としている。正式略称は「共和国」だといふ。

筆者はこの論理が理解できない。「略称」には「正式名称」にない要素がふくまれているとはいけないのだろうか。「共和国」が略称として用いられることは筆者も承知しているが、これは「通用範囲がきわめて限られた方言的」略称ではないだろうか⁽⁷⁾。

27) ただし、アメリカが朝鮮統一を事実上断念し、国連監視下の自由選挙を通じて南朝鮮に新しい独立国を樹立しようとしたのに対して、李承晩は新たに樹立される大韓民国の正当性を北朝鮮にまで及ぼそうとしていた（「北進統一」論）。 [小此木政夫（1997：89）]

28) 端午は朝鮮半島北部では大きな名節の一つで、南東部でも、以前は盛大に祝われていた。 [本田洋（1997：149）]

もちろん27) のように「北朝鮮」（と「南朝鮮」）が地域名称として用いられる例もある。しかしこれは朝鮮民主主義人民共和国（と大韓民国）が成立する前で、朝鮮半島が「地域」としてしか存在しなかった時期であるためであろう。28) のような言い方がなされるのは、「北朝鮮」が国名として定着していることの傍証になろう。結局、現在用いられる朝鮮民主主義人民共和国の略称には「朝鮮」、「共和国」、「北朝鮮」のみつつが存在することになる。

以上、「朝鮮」に対する言いかえを意味ごとにまとめてみよう。

- ①朝鮮半島、半島、コリア、KOREA、韓国・朝鮮など
- ②李氏朝鮮、李王朝、李朝、朝鮮王朝、朝鮮朝、朝鮮時代、李朝時代、朝鮮王朝時代、李氏朝鮮王朝時代
- ③なし（？）
- ④共和国、北朝鮮、北

結論から述べよう。「朝鮮」は第一義的には総称といってよい。その点で植田晃次（2002：10）は正しい。ただし朝鮮民主主義人民共和国の略

称は「共和国」が唯一のものであり「朝鮮」に略称の意味がまったくないかのごとく述べているのは不適切である⁽⁸⁾。

「朝鮮」が第一義的に総称であるとみる根拠は次のとおりである。

第一に、④の意味の言いかえとして「北朝鮮」が一般的に用いられていることである。

29) 中国語は北京放送、朝鮮語は北鮮と韓国の両方、ロシア語はシベリヤ、カラフトからの放送が、NHKの放送を終わったころの時間から中波でもはっきり聞こえる。 [種田輝豊 (1973: 214)]

北朝鮮は29)のように過去において「北鮮」と呼ばれたが、蔑称であるということから現在公式にはまず用いられない⁽⁹⁾。「北朝鮮」はその言いかえだろう。大韓民国には「韓国」という適切な略称があるが、正式名称がより長い朝鮮民主主義人民共和国については、「共和国」は「半島」とおなじく特定の文脈でしか用いることができず、当事者が主張する「朝鮮」はさほど用いられない。これは「朝鮮」が朝鮮半島北部ではなく、朝鮮半島全体をさしているという日本語母語話者の語感の反映である。そうすると朝鮮半島北部を「北朝鮮」と呼ぶのはいたって自然であり、それが地域であるか国家であるかは無関係である⁽¹⁰⁾。「韓国と北朝鮮」という言い方は、「韓国」が国名の略称として用いられる文脈においては、おなじく「北朝鮮」も国名の略称であるというべきである。

第二に、②の意味に対するおびたしい言いかえの存在である。これらは、韓国政府の主張する「朝鮮」という用語を何とか避けようとする「努力」のあとだとみることができる。いうまでもなく「朝鮮」が総称であるという認識が日本語母語話者に根づよく存在するからである。②の意味で用いられた用例は、おそらく朝鮮語母語話者によるものであり(②の意味であることが明確な日本語母語話者による用例はみいだせなかった)、多数の言いかえの存在は、②の意味での「朝鮮」を不自然なものと感じる日本語母語話者の語感の反映である可能性がたかい。その意味では「朝鮮」に②の意味を設定すべきではなかったかもしれない。

第三に、後述するように韓国政府は日本国内における日本語の名称として「朝鮮語」ではなく「韓国語」を用いるように要求してきた。「朝鮮

人」という名称が朝鮮民族全体を指す総称として用いられることも減ってきてはいる。しかし「朝鮮民族」や「朝鮮半島」などは依然として「朝鮮」である。これは次のように理解できる。すなわちふたつの独立国家が存在することにより「朝鮮語」は「韓国語」と、「朝鮮人」は「韓国人」と区別する一定の理由づけが可能であるが（それぞれの標準語、国籍の存在）、「民族」や「半島」を区別することはできない。そしてその場合に韓国における朝鮮語の「ハンミンジョク〔韓民族〕」および「ハンバンド〔韓半島〕」を直訳した「韓民族」および「韓半島」は現代日本語ではほとんど用いられていない。そして筆者の認識では、韓国政府も「朝鮮民族」や「朝鮮半島」という名称は変更を要求していない。このことは、いかようにもわけることができない Korea 全体については「朝鮮」を用いる、という習慣が日本語には存在する、ということの意味する。

3.3. 「韓国」に対する言い換え

「韓国」という名称は大韓民国、大韓帝国をあらわす①、②の意味に関しては、言い換えはおこなわれないうである。ただし大韓民国をみとめない、という意味で「南朝鮮」という言い方をすることは、特に過去においてみられた。文脈によりあきらかな場合、「南」ということもある。

また③は総称の意味をもつが、総称としては「韓国」より「朝鮮」が優勢だとかんがえられる。言い換えは①の意味と基本的に同一であるといえようが、「韓国（朝鮮）」という表現が、総称であることを明確にしたい場合に用いられるようである。例をあげておこう。

30) それまでは、韓国（朝鮮）の思想、文化、文学などへの言及、紹介や研究は「南」と「北」のいずれかの立場に立った在日韓国・朝鮮人によるものがほとんどであって…。 [川村湊（2002：9）]

4. 「朝鮮語」と「韓国語」は不適切な呼び名か

4.1. 大前提は「日本語による呼称」

まず確認しておくべきは、くりかえすが、植田晃次（2002：6）がいう

ように「本稿では「日本人による日本語での呼称」という視点をとることを大前提とする」ということである。すなわち「ちょうせんご」あるいは「かんこくご」という名称を論じているのであって、本国における「チョソノ〔朝鮮語〕」や「ハングゴ〔韓国語〕」という名称の是非を問うているのではないということである。そして「ちょうせんご」と「チョソノ〔朝鮮語〕」、「かんこくご」と「ハングゴ〔韓国語〕」がそれぞれ同一の漢字で表記されるからといって、「ちょうせんご」や「かんこくご」が指し示すものと「チョソノ〔朝鮮語〕」や「ハングゴ〔韓国語〕」が指し示すものを十分な検証なしに等価のものと結論づけるのは誤りである、ということである⁽¹¹⁾。このあたりは植田晃次(2002:11)が「漢字の惑わし」と名づけて適切に論じている⁽¹²⁾。あわせて「朝鮮」と「韓国」がそれぞれ多義語であるという事実も重視する⁽¹³⁾。

4.2. 「朝鮮語」は不適切な呼び名か

「朝鮮語」は不適切な呼び名であるという主張の例として、まず小栗章(2003:44-45)で紹介されている、金鍾浩氏の「「韓国語」と呼ぶべきである」の「「朝鮮語」に抵抗がある理由」では次のように述べている。

- ・「朝鮮」という名称は、韓国では過去の王朝時代を意味する。
- ・「朝鮮」という名称に「半島」「史」「民族」などの語をつけて南北全てを表す方法は、朝鮮王朝時代や植民地時代には通じるが、現在では北韓式の呼び方に過ぎない。
- ・韓国では、「半島」「史」「民族」などの語に「韓国」「韓」をつけ、南北全体のものとして認識する。
- ・現在、日本は政治的にも文化的にも韓国と密接な関係にある。北韓側に擦り寄った感を否めない「朝鮮語」を「正しい」とするのは納得できない。
- ・日本人が「朝鮮」という言葉を口にすると、差別的なニュアンスを伴うことが少なくない。

これらは、最後のひとつを除きすべて「ちょうせん」ではなく「チョソ

ン〔朝鮮〕を前提している。その上で「朝鮮半島」や「朝鮮語」を北朝鮮式であると断じているのである。「チョソンバンド〔朝鮮半島〕」や「チョソノ〔朝鮮語〕」は北朝鮮式であるが、「ちょうせんはんとう」や「ちょうせんご」は北朝鮮式ではない。あえていえば日本式である。残念ながら「朝鮮語」反対論にはこの水準のものがおおいのである。

ただし前述のとおり、日本語としての「朝鮮」に「過去の王朝時代」や「朝鮮民主主義人民共和国」の意味があるのは否定できない。これは次のようにかんがえることができる。「朝鮮」の意味をもう一度みてみよう。

- ①総称
- ②過去における王朝の名称
- ③韓国併合から大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国成立までの名称
- ④朝鮮民主主義人民共和国の略称

「過去の王朝時代」は②の意味であり、「朝鮮民主主義人民共和国」は④の意味である。また金氏の主張には直接あらわれないが、「朝鮮」が過去の植民地時代の名称であるからふさわしくない、という意見もある。その「朝鮮」は③の意味である。

しかし日本語の「朝鮮語」は、「朝鮮半島」などと同じく①の意味にもとづくものである。つまり「朝鮮」が多義語であるという事実に気がつけば、このような誤解は解消するのである。さらにいえば「朝鮮」が「過去の王朝時代」の名称であることが、その名称を用いていけないという理由にはならない。英語名「Korea」などが「過去の王朝」である「高麗」に由来することを想起すれば充分であろう¹⁴⁾。

なお、日本語の「ちょうせん」ということばが差別的であるという指摘は、大韓民国のみからのものである（「ちょうせん」が差別的なニュアンスで用いられることを否定するものではない）。朝鮮民主主義人民共和国からはまったくない。その点、植民地支配に関するさまざまなことがらとはことなる。では南北の主張がことなる理由は何か。北は国号に「朝鮮」を冠し、南はそうではないからである。「朝鮮」に対する不快感は、差別的だからではなく、南北の国号の差から出ているものとみるべきである。

以上をまとめると、日本語の名称「朝鮮語」の「朝鮮」は、①の意味で

あって、それが②、③、④の意味であるとの「誤解」にもとづいた韓国からの批判は「朝鮮語」が不適切であるという理由にはならないのである。

4.3. 「韓国語」は不適切な呼び名か

それでは「韓国語」ははたして不適切な呼称なのか。上でも一部引用したように、植田晃次（2002：6）は田中克彦（1981：14-15）を引用しつつ¹⁶⁾「言語名と国家名は相容れないものであり、韓国語のように国家を単位として言語の呼称を設けることは矛盾を持つ表現である。朝鮮語の使われる時間的・空間的広がりを考慮すると、大韓民国成立以前（大韓帝国期についてはここでは措く。以下同様）や中華人民共和国（以下、中国）の朝鮮族の朝鮮語をも韓国語と呼ぶにはかなり無理がある」と述べている。また大村益夫（1983）は「現代日本で韓国といえば、それは大韓民国のことであり、したがって韓国語といえば、韓国の支配範囲で使われる言語という意味になってしまう」としている。

また田中克彦（1981：14）は「言語の名が国家の名によって決まるべきあいがある。ふつう、多くのばあい、日本国語、フランス国語というふうには、ことばの名は国の名では示さないものである。あるいは、固有名詞としてのことばの名には国の名は入ってこないものである。それは国家よりも、より本源的な関係を言語ととりむすぶ民族の性格からして自然なことである。ところが、世界にめずらしい例として韓国語と中国語がある」と述べている。国家名が「日本国」や「フランス国」であり、総称は「日本」や「フランス」であるから、言語名には総称を用いて「日本語」あるいは「フランス語」と呼ぶのだという主張である。「韓国」は国名であるから「韓国語」は不適切だ、というわけである。

しかしかんがえてみよう。われわれが国家を指す場合に、いちいち「日本国」や「フランス国」という表現をつねに用いるだろうか。

31) そのうえで長官は「日本の法律に基づいて対応する」と語り、入港の場合は、出入国管理法や…。 [朝日新聞2003年8月8日夕刊3面]

32) エジプト料理も作ります。日本の料理と、香辛料が違うだけなんです。 [朝日新聞2002年4月21日朝刊30面]

33) 橋本元首相が23日、パリを訪問し、フランスのシラク大統領と会談した。
[朝日新聞2003年6月24日夕刊3面]

34) 中流層にはフランスのワインや料理が大好きという人も多いが、一方で頭から…。
[朝日新聞2001年3月3日夕刊1面]

31) と33) は国家としての「日本」と「フランス」を指している。そしておなじ形式が32) と34) では総称として用いられている。総称と国名が同一の単語であらわされるのはいたってふつうのことである。ある地名が示す地域に独立国家が存在すれば、その地名は国名としても総称としても用いることができるのである。要するに、国家を示す場合、かならずしも「国」は必要ではないのである。合成語の場合もおなじである。

〔総称〕 日本語、日本料理…

〔国名〕 日本政府…

〔総称〕 フランス語、フランス料理…

〔国名〕 フランス政府…

それではなぜ「韓語」ではなく「韓国語」と呼ぶのであろうか。それは「韓」が単独では用いられず、つねに「韓国」という形で用いられるからである。日本語の言語名は、自立形態素としての「地域名」に「語」をつけることによって形づくられるのが通常であるからである^[16]。通常用いられる形式をゴチックで示す。

日本+語=日本語

日本国+語=日本国語

フランス+語=フランス語

フランス国+語=フランス国語

韓+語=韓語

韓国+語=韓国語

大村益夫・権泰日(1995: iv) や植田晃次(2002: 10) は「韓国語」はいけませんが「韓語」であればよいと述べている。現代日本語としてほとんど用いられない「韓語」はよくて「韓国語」はなぜいけないのか。「韓国」が国家名であるという田中克彦(1981: 14) などの根拠は、結局のところ「韓国」が「国」の字をふくむからだということではかない。

ここで時枝誠記(1941: 228-229) をみよう。「白墨」は現今の主体的意識に於いては、「白い」「墨」といふ二個の概念単位に還元されるのでは

なくして、「チョーク」といふ一概念単位を表すに過ぎない。従つて「赤い白墨」「青い白墨」といふことが可能なのであつて、若し主体的意識に於いて「白墨」が二の概念に分析されるとしたら、「赤い白墨」といふが如きは全く非論理的表現といはなければならない（漢字は新字体による）^[17]。すなわち、いったん「韓国」という単語が成立すれば、それが本来は国の意味であつたとしても、「フランス」や「日本」が「一概念単位を表す」のとまったく同様に、「韓国」も「二個の概念単位に還元されるのではなくして」、朝鮮半島南部（場合によっては朝鮮半島全域）をあらゆる地域名として機能するのである^[18]。そして「現今の主体的意識に於いて」これが「一概念単位」であるからには、「フランス」や「日本」がそうであるのおなじく、文脈によって総称にも国名にもなるのである^[19]。「国」をふくむから「国家名」とであると限定する観点こそ「漢字の感わし」であり「漢字の亡霊」であるとみななければならない^[20]。

〔総称〕 日本語、日本料理…	〔国名〕 日本政府…
〔総称〕 フランス語、フランス料理…	〔国名〕 フランス政府…
〔総称〕 韓国語、韓国料理…	〔国名〕 韓国政府…

以上の議論から、「韓国語」と「フランス語」は共時的には同一の構造をもつ単語であることが明白となった。上で引用した田中克彦（1981：14・15）などはこの点ではすべて誤りである。朝鮮民主主義人民共和国の言語、さらには李朝や高麗の言語を「韓国語」と呼んでも論理的には矛盾はない。何しろ「言語名と国家名は相容れないものであり」（植田晃次（2002：6）、「国号と言語名は一致しないのが通常である」（大村益夫（1983））のだから。「ドイツ語」がオーストリアやスイスの言語をもふくむのおなじことである。

5. 言語名称の選択は主体的になされるべき

5.1. 「朝鮮語」と「韓国語」はともに正当な名称

「朝鮮語」あるいは「韓国語」という名称が不適當であるという主張には正当性がないことを上の議論によって確認した。ただし大韓民国の言語

と朝鮮民主主義人民共和国の言語が同一の言語である以上、朝鮮半島の言語全体を「朝鮮語」あるいは「韓国語」で包括して呼ぶべきである。

くりかえすが、韓国の言語が「韓国語」で北朝鮮の言語が「朝鮮語」なのではない⁽²¹⁾。「朝鮮語」は日本語の呼称であり、韓国式の「ハングゴ〔韓国語〕」、北朝鮮式の「チョソノ〔朝鮮語〕」とはいずれも等距離にある。北朝鮮に「擦り寄った」のでは決してない。そして仮に「朝鮮語」を用いる場合、これを朝鮮半島全体に共通する言語の名称として用いるのであるから、ある講座なり学習書なりが韓国の標準語であろうと、それを「韓国語」と呼ぶべき理由にはならないのである。反対に、北朝鮮の標準語を「韓国語」と呼ぶのも論理的には正当である。

日本語には「スペイン語」と「イスパニア語」、「ロシア語」と「ロシヤ語」のように（漢字にまぎれて気がつきにくい、わが「にほんご」と「にっぽんご」も）複数の名称が並行的に用いられるものがある。Koreaの言語を指す名称もこれらと同様、複数の形式が存在するというだけのことである。「韓国朝鮮語」のような「両論併記」式の呼称は、あたかも「スペインイスパニア語」や「ロシアロシヤ語」と呼ぶようなものである。これを南北双方の言い方を取り入れたとか、あるいは「韓国」と「朝鮮」の場合は「語源」がことなるから同レベルにはあつかえないとかんがえたならば、それは「漢字の惑わし」による錯覚である。植田晃次（2002：10）は「総称と正式国名の略称を並べた「韓国・朝鮮」や「朝鮮・韓国」、また、正式国名⁽²²⁾と地域名を並べた「韓国・北朝鮮」などはいびつな表現であり、韓国・朝鮮語、韓国朝鮮語などのパリエーションは一見「中立的」に見えながら、言語の呼称としていびつなものである」と述べているが、「両論併記」式呼称が批判されるべき理由は名称のレベルのちがいにいるのではなく（しかもこの解釈そのものが不相当であることは前述した）、併記すること自体にある。もっといえば、複数存在する名称からひとつをえらびとる、という作業を放棄してしまった主体性の欠如が問題であると筆者はかんがえるのである。

たしかに朝鮮語という言語はふたつの独立国家が存在することによってふたつの標準語が存在する。標準語も変種のひとつであるから「方言」であり、「韓国方言／共和国方言」あるいは「韓国標準方言／共和国標準方言」のように呼ぶことができよう。日本語では方言を「関東語／関西語」

のように表現することがままたり、前述のように「韓国」には朝鮮半島南部の意味、「朝鮮」には朝鮮半島北部の意味があるから、南北の言語を二分する場合に「韓国語／朝鮮語」ということも不可能とはいえないであろう。しかしこれは「方言」の簡略表現なのであり、「言語名」とみることとはできないとかがえるべきである。

5.2. 主体的な名称選択をはばむもの

上ではあえて触れなかったが、「朝鮮」にさまざまな言いかえが生じたのは、これが多義語であるという理由からだけではない。韓国が「朝鮮」という名称を忌避してきたことによる影響が大きい。そしてこの主張の契機となったのが大韓民国国務院告示第7号「国号および一部地方名と地図の色の使用に関する件」であることは、小野田求（1998：303）などで指摘されている^[23]。

名称が社会的に問題となった例として、NHKの朝鮮語講座がある。この成立過程についての論考には大村益夫（1993）や南相璣（1994）などがあり、前者は当時NHKとの交渉の場にあった当事者の記録として、後者は前者をふまえたよりボリュームのある論考として、いずれも意義のたかいものである。ただ開講以降の流れを現在まで追ったまとまった考察はないようである^[24]。筆者も植田晃次（2002：2）の「日本の朝鮮語教育史におけるNHKの朝鮮語講座の位置付けについては別途考察する必要がある」という意見に同感である。また最近では大学入試センター試験の科目への朝鮮語導入をめぐる、言語名が問題になった^[25]。

もうひとつの例として、日本の歴史教科書に対する韓国政府の是正要求問題をとりあげてみたい。「李氏朝鮮」を「朝鮮」へ変更せよと要求した件である。実はこれも「朝鮮語」の名称問題と関連があるのである。

「李氏朝鮮」に対する不快感と変更の要求は「朝鮮語」に対するそれと同様、大韓民国からのみのものである。すなわち朝鮮民主主義人民共和国からはそのような要求は出ていない。これは何を意味するのだろうか。

ここで吉田光男（2001）をみとめることにしよう。

「韓国が「日帝強占期（＝植民地期）に使用された不適切な用語」^[26]と指摘した「李氏朝鮮」を例に考えよう。高麗を倒し14世紀末に成立し

た王朝は「朝鮮」と名乗り、大韓と改称する19世紀末まで国名として用いた。韓国では「朝鮮時代」や「朝鮮朝」と呼ぶ。日本で「李氏朝鮮」とするのは古代に朝鮮を名乗る国が複数あり区別するためだが⁽²⁷⁾、韓国は「正式国名を用いず、王家の姓をつけて呼ぶのは、韓国の歴史を矮小化し貶めることだ」と強い嫌悪感を示している。「李氏朝鮮」ではなく「朝鮮」を用いるべきだという主張である。

ところで北朝鮮では「李氏朝鮮」を「リジョ〔李朝〕」と呼ぶ。北朝鮮でこの名称を用いるのは国号が「チョソン〔朝鮮〕」であるために、区別する必要があるからであろう。日本語で「李氏朝鮮」と呼ぶのとおなじ理由である。しかし韓国では「イジョ〔李朝〕」という呼称は「李氏朝鮮」とおなじく「不適切な用語」である⁽²⁸⁾。ある国語辞典では、「イジョ〔李朝〕」が「イッシジョソン〔李氏朝鮮〕」の略だとされ⁽²⁹⁾、「イッシジョソン〔李氏朝鮮〕」の項には「朝鮮を王の姓をつけて呼ぶ語。日帝が朝鮮の格を落とすためにつくり出した語だが、今は檀君のたてた朝鮮と区別するために用いることもある」と説明されている（国立国語研究院（1999：4942、4956））。韓国の国語辞典に「日帝がつくり出した語」（つまり日本語）が登場するのも不思議な話であるが、現在の韓国では「李氏朝鮮」と「李朝」はこのようなニュアンスの語としてとらえられているのである。つまり現在の韓国では「朝鮮語」や「朝鮮人」⁽³⁰⁾に嫌悪感を示しながら、「李朝」や「李氏朝鮮」は「朝鮮」と呼べと、一見矛盾した要求をしているのである。

さて、日本語としての「朝鮮」は、以下の意味をもつ多義語であった。

- ①総称
- ②過去における王朝の名称
- ③韓国併合から大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国成立までの名称
- ④朝鮮民主主義人民共和国の略称

①の意味は、現在、Korea の総称として「韓国」よりもはるかに一般的であるといつてよい。また日本で「李氏朝鮮」という名称が用いられるのは、「朝鮮」が総称であるという前提によるものである。そして韓国の要求どおり「李氏朝鮮」を「朝鮮」と呼ぶことになれば、それは現在ほと

んど用いられていない②の意味の領域がひろがることを意味する。それは結果的に①の意味の領域がせばまることを意味することはいうまでもない。

ここまでくれば、「朝鮮語」を「韓国語」に変更せよとの要求と、「李氏朝鮮」を「朝鮮」に変更せよとの要求が、表裏一体のものであることが明白であろう。現に吉田光男（2001）は「まず、「朝鮮」という言葉が持つニュアンスを考えなくてはならない。差別的な意味合いをこめ日本人が使ってきたことを韓国人は忘れない。激しく対立してきた分断国家が「朝鮮」を名乗っている事情もある。複雑な歴史と現実がある「朝鮮」を歴史上の存在に押し込めることが、韓国では歴史を回復する上で必要なのだ」と述べているのである。

「朝鮮」に「差別的な意味合い」があるのを筆者は否定しない。しかしそれが「朝鮮」ということばを使うべきでない理由にはならない。何度もいうように、北朝鮮ではこのような主張はなされないのである。前述のように「激しく対立してきた分断国家が「朝鮮」を名乗っている事情」が、「朝鮮」を嫌悪するほんとうの理由なのである。

吉田光男（2001）は、事実の指摘としては正しいが、あくまでもこれは韓国の立場ではそうだということであり、「日本人による日本語での呼称」という視点を採ることを大前提とする」という主体的な姿勢の対極にあるものといわざるをえないのである。

5.3. 朝鮮語教育の普及をはばむもの

なぜ筆者はこのように名称にこだわるのか。その理由は、筆者の従事する朝鮮語教育にふかくかかわってくるからである。

南相瓊（1994）をもうすこしくわしくみてみよう。朝鮮語講座の開設はかなりふるくからNHK内部で検討されていたことがわかる。開設のごきは、くわしいことは不明であるが1964年にあったという。1965年の日韓国交正常化に向けて準備された可能性がたかいたかんがえられる。その後1970年、1974年にもNHK内部で検討されたが実現にはいたらなかった。理由は名称問題である。そして1982年度から「朝鮮語講座」の名称での開設が内定したところに、韓国の圧力がくわわり⁽³¹⁾、結局1984

年度「アンニョンハシムニカ～ハングル講座～」が開始されたのである。

日本社会において朝鮮語がいわばふつうの外国語としてみとめられたのは塚本勲（2000）などにくわしく描写されているように、最近のことである。ある外国語がNHKの講座に存在するかどうかは、その外国語が日本社会でいわば市民権をえているかどうかの、もっとも大きな指標のひとつであるとかんがえる。仮に初期に朝鮮語がNHKの電波にのってれば、それが契機になって、大学の講座や、ひいては研究者の層も広がり、現在よりもはるかにすすんだ体制ができていたのではないかと想像する。そしてこれも推測でしかないが、「朝鮮」という名称に対する否定的なニュアンスも、はるかに少なくなっていたとかんがえる（その意味でNHKが「朝鮮語」の名を撤回せざるをえなかったのはまったく残念なことであった）^[32]。

李崇寧（1985：4）は「日本の人々が外国語の勉強といえば英独仏語の勉強と考えるのはいささか腑に落ちない点もある。それよりも隣国の言語から始めるのが自然の道ではなからうかと思う」と述べている。まったく同感である。朝鮮語にふつうの外国語としての地位をあたえてこなかった責任が日本社会にあるという大前提のもとで述べるのだが、韓国での「朝鮮」という名称の忌避現象^[33]が、結果的に日本での朝鮮語教育の普及を阻害する一因になるということ、韓国にはわかってほしいとおもう。

6. 筆者が「朝鮮語」を用いる理由

大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の言語が同一であるという前提で、筆者が「朝鮮語」を用いる理由を述べたい。

第一に、総称として「朝鮮」が「韓国」より一般的であるとかんがえるからである。「韓国」にも総称の意味があることは用例で確認したが、しかし1948年以降の朝鮮半島北部の地域名として「韓国」を用いることはむづかしいのではないかとおもう。もちろんその地域の言語名に「韓国語」を用いるのは、誤りではない。ドイツとオーストリアなどにまたがる地域で用いられる言語を「ドイツ語」と呼べるのであるから。しかし、ドイツ語の場合はその通用領域を共通して指し示す名称が（筆者の知るかぎり日本語では）存在しないのに対し、朝鮮語には「朝鮮」という、通用領

域にかなりちかく一般的に用いられる名称が存在するのであるから「朝鮮語」は適切な呼称であるとかんがえる。ただし「朝鮮」と呼んでも、朝鮮語の使用領域と地域名としての「朝鮮」が完全に一致するのではないから（中国の朝鮮族自治州を地域名として「朝鮮」と呼ぶことはできない）、「韓国語」よりも「朝鮮語」の方が、いわば「ふさわしさ度」がたかいと筆者は判断する、ということである。

第二は、このような場で発言するのに躊躇しないでもないが、あえて述べれば「韓国語」強要の圧力のためである。筆者は何度も述べるように「韓国語」という名称自体は正当だとかんがえる。しかし、朝鮮半島の南北対立に起因する「朝鮮」という名称の忌避現象を、まるで「朝鮮」が蔑称であるかのような理由をあげて使わぬように圧力をかける現象が存在してきた⁽³⁴⁾。言語名称は主体的にえらぶべきものである。日本語としての「朝鮮」をまもるためにも「朝鮮語」を使おうとおもうのである。

第三に「朝鮮」にまつわる語感の問題である。上でも述べたが、「朝鮮」に否定的な語感があることを筆者は否定しない。その場合、とるべき方法は次のふたつであろう。ひとつは「朝鮮」を使うのをやめることであり、もうひとつは否定的な語感を除去することである。「朝鮮語」を用いる理由は、筆者が後者の方法をとりたい、つまり「朝鮮」から否定的な語感をとりのぞきたいとおもうからである。本来蔑称ではない「朝鮮」という名称に否定的ニュアンスを植えたのは日本人である。このニュアンスをとりのぞくのは、日本人に課せられた課題だと筆者はかんがえている⁽³⁵⁾。そしてそれは「朝鮮」を歴史上の存在に押し込める」（吉田光男（2001））ことによってではなく、あくまでも「朝鮮」を用いつづけることによってのみ達成可能であると筆者は信ずるからである。

7. おわりに

筆者は以上の理由から「朝鮮語」をえらぶ。いうまでもなく名称の選択は自由である。「韓国語」でも「コリア語」でもその他の名称でもよい。要は各自が他人を納得させられる理由をもって名称を選択することである。そして良心によって各自が選択した名称に圧力をかけるようなことはあってはならない。小栗章（1999）の「まずは、複数の名称が使われて

いる現状を認めることだ。その上で妥協する度量が、以前にも増して求められるのではないだろうか。このような状況を招いた主たる要因は日本人の知的怠慢にある。決して、隣国の分断状況に伴う混乱のせいにはしてはならない。その時どきの政治状況に追隨する態度も許されない」という発言に賛成する。特に「その時どきの政治状況に追隨する態度も許されない」との意見には同感である。何度もくりかえすが「日本人による日本語での呼称」を主体的に選択することが求められているのである⁽³⁶⁾。

本稿のもととなった発表は、はじめに述べたように大韓民国の政府機関が主催者としてくわわるフォーラムでおこなわれた。かならずしも韓国政府の意にそわない発表内容であったにもかかわらず、自由に発言させていただいた、その寛容に対して、この場を借りてお礼を申し上げたい。そして発表の機会をいただき、本稿のきっかけをつくっていただいた国際文化フォーラムの小栗章氏をはじめ、フォーラム関係者の方々にも心から感謝の意を表したい。

注

- [1] 植田晃次(2002)では朝鮮半島の地図により朝鮮半島の「南朝鮮」と「北朝鮮」の境界を示しているが、「地域は国家(の実行(ママ)支配範囲)によって分けられないため、軍事境界線は入れていない」として、緯線(北緯38度よりもやや北寄りであるが、単なる印刷の都合によるのか、あるいは意図的なものなのかは不明である)により「北朝鮮」と「南朝鮮」(あるいは「北韓」と「南韓」)をわけている(：9)。地域名だとしても、北緯38度以南にある開城が「北朝鮮」であり、北緯38度以北にある東草が「南朝鮮」だとするのは誤りであろうか。「東ドイツ」と「西ドイツ」という地域名(：8)は経線によって一直線にわかれることを想定しているのだろうか。
- [2] 日本語のいわゆる「ら抜きことば」に関して、言語学者のなすべきは、それを「まちがい」であると断罪することではなく、それが用いられる背景をさぐることであることを想起すればよいであろう。田中克彦(1992：2)は以下のように述べている。

「戦後の言語学をとらえたイデオロギーは、アメリカ流に言えば記述

主義、ヨーロッパ流に言えば構造主義であったから、日本の辞書も当然それを信奉し、理想とした。このイデオロギーは、二つの目標をかかげてたたかった。一つは、ことばはかくあるべしと、きめてかかる規範主義から解放されること、二つは、いま、げんに話されていることばの状態そのものを、歴史的な解釈や、つじつまあわせの小細工を加えることなく、ありのままに、^{シグナ}兵時的な構造として示すことであった。」

- [3] 用例は、原文のルビやゴチックなどを適宜省略した。また…は文の一部省略を、……は文の省略をあらわす。／は改行をあらわす。
- [4] 「一九一〇年八月、朝鮮植民地化を宣言する明治天皇の勅令が出され、この地を「朝鮮」と呼ばなければならないと定められた」（吉田光男（1997：31））ことから「朝鮮」は植民地期における Korea の正式名称であるといえる。[図1] では1948年までをひとつの時期とみなした。
- [5] 名称が問題になるのは、後述のとおり「李氏朝鮮」に関してなので、「衛氏朝鮮」などに関しては言及しないことにする。
- [6] マスコミによる呼称に関して「在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）は「略称は朝鮮とすべきだ」などとマスコミ各社に申し入れをした」とあり（『朝日新聞』2003年1月9日朝刊33面）、また「正式略称は「朝鮮」だ」という意見（萩原遼（1989：10））もあるが、これは「北」のみが「朝鮮」であるという主張につながり、結果的に当事者の意に反して「朝鮮」を半島全体の総称として用いにくくなるのではないだろうか。
- [7] 平恒次（1974）は「アメリカ合衆国の施政権下にある琉球列島から出るためには、「民政府」と称する同国の出先期間から「身分証明書」というものを発給してもらう必要があった」のだが（：26）、その身分証明書の発給機関の英語名称である「United States Civil Administration of The Ryukyu Islands」を日本語で「琉球列島米国民政府」としたのは「誤訳ではないが、通用範囲がきわめて限られた方言的意識であることは否めない」と述べている（：28）。
- [8] 植田晃次（2002）は全体を通じて、ある形式が複数の意味をもちうること、ある意味をあらわすのに複数の形式が存在しうることにに対する配慮に欠けているようにおもわれる（ただし総称として「朝鮮」と

「韓」を同列においている)。

[9] このことについては植田晃次 (2002: 4) に言及がある。

[10] 植田晃次 (2002: 8) は「東ドイツ」や「西ドイツ」も地域名であって、国名の略称としてはたとえば「民主ドイツ」や「連邦ドイツ」のように称するべきであったと述べているが、これは次のようにかんがえればよい。すなわち「東日本／西日本」と「東ドイツ／西ドイツ」は造語論的にはまったく同一である。「東ドイツ／西ドイツ」のみが(過去において)国名の略称として用いられたのは、その地域にそれぞれ独立国家が存在したからである。換言すれば、ある地名が地域名であるか国名としても用いられるかは、その地名が指す地域に独立国家が存在するかどうかのちがいでしかないのである。もし日本列島の東西にそれぞれ独立国家が存在すれば「東日本／西日本」は国名の略称としても機能するであろう。

[11] 黒田勝弘 (1983: 95-96) は「ところが当地で留学したり、仕事をするようになってからやはり「朝鮮語」ではどうもいけないな、という考えになりました。理由は、当地では誰も自分たちのことばを「朝鮮語(チョソノ)」とはいっていないということです。したがって、たとえば受講生が当地にきて「私はチョソノを勉強しています」とやったのでは、最初から意思の疎通を欠くようなものです」と述べている。「ちょうせんご」と「チョソノ〔朝鮮語〕」が等価であるという誤った認識のもとに議論がなされている。

[12] 大村益夫 (1993: 302-303) もこの現象を「漢字を媒介として自国における漢字語の用法をもって他国での用法を無視し相手を非難・批判するのは、外国語としてのおそれを知らぬものといわざるをえない、漢字文化圏と称される地域での不幸である」と、「漢字の亡霊」と呼びつつ同様の主張をおこなっている。

[13] 「朝鮮語」の造語成分としての「朝鮮」が、単独で用いられる「朝鮮」とまったくおなじ語彙の意味をもつかに関しては議論の余地があろう。本稿では基本的におなじ意味であるとみて議論をおこなう。合成語の意味に関する問題は内山政春 (1997: 49-50) でも言及した。

[14] 英語名 China, Finland, Hungary などが現代の本国の言語による国家名に「語源」をもとめることができないことをかんがえると、植田

晃次（2002：7）が総称として「朝鮮」と「韓」のみを候補とするのも一種の「漢字の惑わし」なのではないだろうか。

- [15] 植田晃次（2002：6）に引用された田中克彦（1981：14-15）は以下のとおりである。「朝鮮半島には、その政治的境界線を問わず一つの民族によって一つの言語が話されているという認識に立つならば、これを朝鮮語と呼ぶのは自然である。それに対して、韓国という国家を単位とする言語の呼称を設けることは、朝鮮半島全域におよぶはずの言語を一つの国家だけに限定し、ことによると国境外にも話されている同一の言語を排除することになる点でふさわしくない。それはまた、みずからすすんで二つの異なる言語の存在を主張する可能性を含んでおり、したがって、二つの民族の存在を主張することにもなりかねない。そして、それが現実にある民族の状況と対応していなければ、この呼称は矛盾となるであろう。」
- [16] 「英語」という例外もある。ただしこの用語をきらって「イギリス語」ということがある。これは「英語」が例外であることが、英語が特権的地位にある言語であるような語感にむすびつくことを拒否し、他の言語と同列な地位におこうとする意志のあらわれだと筆者は理解している。
- [17] 同様のことは、徳川宗賢編（1979：55-56）にも次のように述べられている。「命名した当初は、そのもの特徴をよくとらえた名称だったのに、ものの側が変化していったために、語源と実体がちぐはぐになってしまうのである。白や緑色のコクバン、靴を入れたゲタバコはその例である。この場合、「黒い板」という語源が常に意識されてコクバンと呼ばれるのではない。コクバンという音で「黒板」を指すというのが約束事になっているのである。命名の合理性は約束事が成立する際の単なるきっかけでしかない。」
- [18] 地域名として用いられた「韓国」は筆者の語感では大韓民国の領域のみを指すのであるが、現実には「古代の韓国」などの表現が用いられるのは用例で確認したとおりである。ただし現代の大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国をあわせて「韓国」とは呼びにくいのではないだろうか。
- [19] 小野田求（1998：308）は、根拠は示していないが「韓国」は、

国名と地域名をあらわすことができる」と述べている。

[20] 植田晃次 (2002:7) は、韓国では本来「ハン〔韓〕」が総称なのだが、それが国名の略称であるはずの「ハングク〔韓国〕」と混用され、「ハングクサ〔韓国史〕」などが大韓民国成立以前もふくむととらえられていると述べている。そして「これは韓国における朝鮮語の用法の内部問題である」としているのだが、「かんこく」を国家名であると結論づけるのであれば「ハングク〔韓国〕」も同一の理由で国家名だとすべきではないだろうか。ただ興味ぶかいのは、前述した「いかようにもわけることができない Korea 全体」の意味として用いられる「朝鮮民族」や「朝鮮半島」は韓国の朝鮮語でも「ハンミンジョク〔韓民族〕」、「ハンバンド〔韓半島〕」のように「クク〔國〕」がふくまれないことである。国籍とは無関係の「朝鮮人」は「ハニン〔韓人〕」である。本稿の主張を撤回するつもりはないが、「国」という要素が語感に一定の影響をあたえることは否定できない。

[21] 重村智計 (2002:176) の「韓国語と朝鮮語は、どう違うのか。韓国で使われる言葉が、韓国語である。北朝鮮で使われる言葉を、朝鮮語と呼ぶ」のような主張は日本語による言語名称に関するものとしては不適切である。また金善美 (2002) も同様のことを述べており (: 228)、このような誤った認識のもとで「日本におけるコリア語教育において導入された講座名、新聞・辞典にあらわれたコリア語の名称について考察する」 (: 215) のは問題であるとしかしいようがない。

[22] 「正式国名の略称」の誤記であろう。

[23] 1950年1月16日告示。呉世敬編著 (2003:43) を筆者が日本語に訳したものを以下に示す。「 」内は同一漢字によって直訳した。

1 わが国の正式国号は「大韓民国」であるが、使用の便宜上「大韓」または「韓国」という略称を用いることができるが、北朝鮮傀儡政権との確然とした区別をするために「朝鮮」は使用することができない。

2 「朝鮮」は地名としても使用することができず、「朝鮮海峡」、「東朝鮮湾」、「西朝鮮湾」などはそれぞれ「大韓海峡」、「東韓湾」、「西韓湾」などと改めて呼ぶ。

3 政治区分地図にあってわが国の色は緑色とし、赤色は使用するこ

とができず、わが国の色を明確にあらわすために、隣の中国は黄色、日本は桃色、ソ連は紫色とする。」

[24] 筆者は2003年1月から3ヶ月間、ラジオ朝鮮語講座応用編を担当する機会をもった。担当者の話と筆者の体験からいくつか記してみたい。

テキストでは「朝鮮語」や「韓国語」という名称は避けているという説明であった。ただし「韓国・朝鮮語」は問題ないらしい。にもかかわらず木内明（2002：54）のように「韓国語」を用いた例がなくはない（「開講にあたって」）。筆者はそのことを指摘した上でおなじ「開講にあたって」で編集者の了解のもとに「朝鮮語」とかいたところ、最後の最後にストップがかかった。そのときはたしか代案として「韓国・朝鮮語」と「ハングル」が提示されたと記憶している。「朝鮮」にはきびしいようで、「ハンシクチプ〔韓食-〕」を「朝鮮料理店」と訳したところ、ふつうはそのようにはいわないとの編集者の判断のもとに「韓国料理店」となされた。ちなみに大阪外国語大学の岸田文隆先生による巻末の連載で「朝鮮語」が用いられているのは、編集者によれば、それが李朝時代の言語をあらわしているからだそうである。ただし放送は（あとに残らないということから）ややゆるやかで、韓国人講師が「韓国語」と発言したこともあるそうなので、筆者も「朝鮮語」を何度か使った。どうやら無事に（！）電波にのったようである。

なおNHK国際放送局では、内部的には言語名称として「朝鮮語」を、そして朝鮮半島全域を指す地域名として「朝鮮」を用いている。日本放送協会（2003）参照。

[25] 『朝日新聞』2001年1月9日夕刊19面参照。

[26] 韓国政府の歴史教科書再修正要求の要旨が『朝日新聞』2001年5月9日朝刊36面に掲載されている。

[27] 吉田光男（2001）は「日本で「李氏朝鮮」とするのは古代に朝鮮を名乗る国が複数あり区別するため」であると述べている。これも一面の事実であろうが、総称としての「朝鮮」と区別するためであるという点に触れるべきであろう。

[28] 厳密には、韓国政府の要求には「李氏朝鮮」はあるが「李朝」はない。しかし検定の結果「李氏朝鮮」とともに「李朝」も削除されたと報道されている（『産経新聞』2002年4月10日3面）。

- [29] 李朝の「朝」は朝鮮の「朝」ではなく王朝の「朝」である。ベトナムの王朝名「李朝」を想起すればよい。この国語辞典ではベトナムの李朝も「イジョ〔李朝〕」として立項している（「イシアンナム〔李氏安南〕」は送り見出し）。歴史教育用副読本も、ベトナムの「李朝」を「イジョ〔李朝〕」と表記している（崔完基ほか（2002：79））。ベトナムの「歴史を矮小化し貶めること」にはならないのであろうか。
- [30] 現代の韓国人は日本語の知識がないかぎり「ちょうせんじん」なる単語を知らない。知っているのは「ちょうせんじん」が外来語として朝鮮語の語彙にはいった「チョセンジン」である。「朝鮮人」という漢字語を朝鮮語読みすれば「チョソニン」であるが、彼らはおそらく「チョソニン」を日本語読みしたものが「ちょうせんじん」であるという知識はないであろう。彼らが不快に感ずる、彼らにとって蔑称としてとらえられている「チョセンジン」は朝鮮語の単語なのであり、その語感を「ちょうせんじん」にあてはめているのである。金善美（2002：226）は「「朝鮮」という名より「チョウセン」という日本語の響きに韓国人は差別を感じるのである」と述べているが、韓国人にとって差別を感じるのは、大多数の人にとっておそらく聞いたことのないであろう「日本語の響き」としての「ちょうせん」ではなく、朝鮮語としての「チョセン」なのである。
- [31] 名称問題について「講座名決定までの途中経過では、それぞれの政府を支持する在日の民族団体がNHKに陳情に行ったと言われている」（田中俊明（1990：110））などのような記述があるが、これは大村益夫（1993：306-307）で述べているようにあやまりである。韓国は「陳情」をおこなったが先行研究をみるかぎり北朝鮮はおこなっていない。田中俊明（1990：110）が根拠としてあげている重村智計（1988：79-82）や金容権（1984：107）にもそうはかかれていない。理屈でかんがえても、NHKは1981年まで「朝鮮語講座」の名称で計画をすすめてきたのだから、北朝鮮が圧力をかける必要はないのである（だからといって「朝鮮語」が北朝鮮寄りだという主張が誤りであるのは本稿で何度も述べている。「北朝鮮系の団体や北朝鮮を支持する学者らが「朝鮮語」の名称を主張し」と述べている（重村智計（2002：176））のは事実の歪曲である）。

[32] NHKが主体性を発揮せずに韓国の圧力に屈したことは弁護できないが、内容が韓国の標準語、ということは実用性を無視できない以上、当然のことではないだろうか。それを批判するのであれば、中国語講座や各種の英語講座が中華人民共和国やアメリカ合衆国の言語「一辺倒」であることも批判されなければならないであろう。

[33] 韓国研究院の崔書勉院長は「NHKが朝鮮語講座というなら、やらないほうがいい」と述べたという。崎谷哲夫（1982：92）参照。

[34] 菅野裕臣（1999：40-41）は次のように述べている。

「学科発足時とその後韓国との交渉に際してずっと悩みの種となったものに学科の呼称問題がある。当時韓国に発送する客員教授の招へい状は駐日韓国大使館で「確認」という手続を事前に踏むことになっていたが、担当科目名が「朝鮮語」だと「確認」するわけにはいかないから、「韓国語」に直せと言ってきた。やむなく第1回の日本文の招へい状はその部分だけ Korean language と記すことで折合いがついたが、第2回以降は韓国文を正文とし、日本文はその翻訳ということで学内で決済し、韓国文の当該箇所はまさに韓国における朝鮮語表記“Han'gugŏ”（＝韓国語）を用いた。学科発足の初期に客員教授が是非自分のために大使館にいっしょに行ってくれと言う。大使館側は朝鮮語学科を韓国語学科と変更するよう激しく要求した。その話を聞いた当時の庶務課長は韓国大使館側の内政干渉に対してかんかんに怒ると同時に、わたくしが韓国大使館にこのこと出かけたことを批判した。」

[35] なお筆者のこの主張に、フォーラムで同席したある韓国人は、一度ついてしまった否定的ニュアンスはとてもとりのぞくことができないと述べた。しかしその韓国人はつづけて、朝鮮が統一されたらまた名称はその時点でかんがえればよいというのであった。このことから、韓国人が「朝鮮」を忌避する理由は北朝鮮式だからだということが推測できる。

なお植田晃次（2002：13）は「朝鮮」ということばが蔑称として用いられること、韓国で「朝鮮」が北朝鮮を想起させることから不快感を持つ向きがあることに対して、「このような点には状況に応じて配慮するということは当然」と述べ、これは「ことば（人付き合い）のマナー」に属する問題だとしている。

しかし配慮というものは双方向になされるべきものであろう。「ちょうせん」が「チョソン〔朝鮮〕」であるとの事実誤認にもとづいて名称の変更を要求するのは、他者への配慮に欠けた態度だと筆者はかんがえる。ただしフォーラムの席で金鍾浩氏は、この問題に介入はしたくないと述べておられた。かつてのような圧力はもうくわえられないものと信じたい。

[36] 大学センター入試の朝鮮語科目の名称問題に関連して、以下のような報道があった（『朝日新聞』2001年1月9日夕刊19面）。

「東京大も頭が痛い。昨年六月にソウル大との間で、互いの地域研究強化を約束。教養学部の「朝鮮語」や、文学部大学院の「朝鮮文化部門」を拡充する予定だが、韓国側からは「名称にも配慮を」との声が届いている。／ある東大教員は「もめないような名前をセンター試験で考えてくれれば、東大も楽なのだが……」。

なお、東京大学の「朝鮮文化部門」は2002年度より「韓国朝鮮文化研究専攻」となった。

参考文献（本稿で言及したもののみ）

- 植田晃次（2002）「言語呼称の社会性－日本語で朝鮮語、韓国語、ハングル…と呼ばれる言語の呼称再考－」『社会言語学』Ⅱ、「社会言語学」刊行会
- 内山政春（1997）「現代朝鮮語の合成用言について－用言第Ⅲ語基＋用言の分析－」『朝鮮学報』165、朝鮮学会
- 大村益夫（1983）「呼称「朝鮮語」に正当性 政治を文化の次元に持ち込むな」『朝日新聞』1981年3月25日付朝刊5面
- 大村益夫（1993）「NHK「ハングル講座」が始まるまで」『早稲田大学語学教育研究所 30年記念論文集』早稲田大学語学教育研究所
- 大村益夫・権泰日（1995）『わかりやすい朝鮮語の基礎』東洋書店
- 小栗 章（1999）「隣の国の言葉を何と呼ぶ？」『朝日新聞』1999年9月17日朝刊4面
- 小栗 章（2003）「フォーラム2002 日本における韓国語教育の現在」『韓

国文化』281、企画室アートプランニング

- 小野田求 (1998) 「朝鮮半島の国家・民族・言語などに対する呼称の現状と問題点」『大阪外国語大学論集』18、大阪外国語大学
- 菅野裕臣 (1999) 「東京外大朝鮮語学科とわたくし」『東京外国語大学百周年記念論文集』東京外国語大学
- 木内 明 (2002) 「応用編」『アンニョンハシムニカ～ハンゲル講座～』19-5、日本放送出版協会
- 金 善美 (2002) 「コリア語の名称をめぐる－名称の統一と多様化－」『言語文化教育学の可能性を求めて－言語文化教育研究論集』三省堂
- 金 容権 (1984) 「朝鮮か？それとも韓国か？」『朝鮮・韓国を知る本』JICC 出版局
- 黒田勝弘 (1983) 『韓国社会をみつめて』亜紀書房
- 呉世敬編著 (2003) 『大法典』
- 国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』斗山東亜
- 崔完基ほか (2002) 『高等学校 歴史付図』教学社
- 崎山哲夫 (1982) 「「韓国語」・「朝鮮語」問題を考える」『朝日ジャーナル』1982年7月23日号、朝日新聞社
- 重村智計 (1988) 『韓国がわかる 最新ソウル語情報』講談社
- 重村智計 (2002) 『最新・北朝鮮ハンドブック』講談社
- 平 恒次 (1974) 『日本国改造試論』講談社
- 田中克彦 (1981) 『ことばと国家』岩波書店
- 田中克彦 (1992) 「辞書－自由のための道具」『辞書を語る』岩波書店
- 田中俊明 (1990) 「「朝鮮語」か「韓国語」か？－言語学的観点から－」『言語科学』25、九州大学言語文化部門言語研究会
- 塚本 勲 (2001) 『朝鮮語を考える』白帝社
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論－言語過程説の成立とその展開－』岩波書店
- 徳川宗賢編 (1979) 『日本の方言地図』中央公論社
- 南 相瓊 (1994) 「NHK「ハンゲル講座」の成立過程にかんする研究ノート－日本人の韓国・朝鮮語学習にかんする歴史的研究（その2）－」『金沢大学教養部論集 人文科学篇』32-1、金沢大

学教養部

日本放送協会（2003）平成15年度国際放送（テレビジョン・ラジオ）の放送番組編集の基本計画 平成15年度国際放送（テレビジョン・ラジオ）の放送番組編成計画

萩原 遼（1989）『ソウルと平壤』大月書店

吉田光男（1997）「ソウル」『もっと知りたい韓国 第2版 2』弘文堂

吉田光男（2001）「試される隣国へのまなざし 歴史教科書問題 韓国・修正要求の意味」『朝日新聞』

李 崇寧（1985）『基礎ハングル』日本の読者に』『基礎ハングル』1-1、三修社

用例に引用した文献

伊藤亜人（1997）「民族と国家」『もっと知りたい韓国 第2版 1』弘文堂

伊藤亜人（1997）「風土と生活」『もっと知りたい韓国 第2版 1』弘文堂

伊藤亜人（1997）「儒教とその制度」『もっと知りたい韓国 第2版 1』弘文堂

伊藤英人（1997）「言語と文字」『もっと知りたい韓国 第2版 1』弘文堂

江上波夫ほか（2002）『高校世界史 改訂版』山川出版社

小倉紀蔵（2001）『韓国、ひき裂かれるコスモス』平凡社

小此木政夫（1997）「政治」『もっと知りたい韓国 第2版 2』弘文堂

川村 湊（2002）「なぜ今、「韓国」の思想なのか？」『韓国』作品社

菅野裕臣（1985）「本紙の編集方針とその内容」『基礎ハングル』1-1、三修社

佐々木高明（1986）「東アジア」『国立民族学博物館展示案内』千里文化財団

鈴木孝夫（1981）「朝鮮語のすすめ」『朝鮮語のすすめ』講談社

高崎宗司（2002）『植民地朝鮮の日本人』岩波書店

田中 明（2001）『物語 韓国人』文藝春秋

種田輝豊（1973）『20ヵ国語ペラペラ』実業之日本社

張 籟根（1997）「文芸と芸術」『もっと知りたい韓国 第2版 2』弘文堂

野村 進（1996）『コリアン世界の旅』講談社

- 萩原 遼 (1989) 『ソウルと平壤』 大月書店
- 秀村研二 (1997) 「伝統社会における女性」『もっと知りたい韓国 第2版 1』 弘文堂
- 福光 恵 (2002) 「北朝鮮と私」『アエラ』 2002年9月25日号、朝日新聞社
- 古田博司 (2002) 「儒教の実践と社会改造」『韓国学のすべて』 新書館
- 本田 洋 (1997) 「年中行事」『もっと知りたい韓国 第2版 1』 弘文堂
- 宮嶋博史 (1995) 『両班 (ヤンバン)』 中央公論社
- 室岡鉄夫 (2002) 「安全保障と軍」『韓国学のすべて』 新書館